

第1分科会

地域貢献アウトキャンパス活動がもたらす 学生の成長：その現状と可能性について

報告者

大西 辰彦（京都産業大学 経済学部 教授）

小川 俊雄（井手町まちづくり協議会 会長）

山崎 智文（京都産業大学 ボランティアセンター コーディネーター）

山口 洋典（立命館大学 共通教育推進機構 准教授）

高橋あゆみ（立命館大学 サービスラーニングセンター 主事）

コーディネーター

佐藤 賢一（京都産業大学 総合生命科学部 教授）

参加人数

97名

大学の外で行なわれている課題解決型学修やボランティア活動（以下、地域貢献アウトキャンパス活動）は、学生にどのような教育効果をもたらしているのだろうか。そして教職員は、どのようなねらいで授業を立案・運営し、またどのような視座で学生の学びを捉え評価することが出来るのだろうか。本分科会は、大学の正課授業の枠組における地域貢献アウトキャンパス活動の取組事例、すなわち学部専門教育（ゼミ・研究室活動）の一環としての同活動、およびサービスラーニングと呼ばれる市民性を涵養する学びの一環としての同活動、さらには大学の正課外の枠組における同活動にも焦点をあて、それぞれの活動における関係者（立案・運営者である教職員、授業を受けた学生、あるいは活動先の関係者など）からの話題提供と会場全体でのオープンディスカッションを通して、上記課題を考える場としたい。

〈第1分科会〉

地域貢献アウトキャンパス活動がもたらす学生の成長： その現状と可能性について

第一分科会の実施にかかる謝辞と結果レポート

本分科会では、地域貢献アウトキャンパス（以下、OC）活動にかかる京都産業大学および立命館大学からの事例報告と話題提供、および4つの質問の焦点（関与者の協働、期待される学生の成長、学修成果アセスメント、学内外での位置付けの未来像）に対する参加者主体の質問づくりワークショップ（以下、ハテナソン：？《ハテナ》+マラソン）をおこないました。登壇者の皆さんには半年にわたる分科会の準備、当日のご活躍、そして報告書の作成でご尽力いただいたことに、そして参加者の皆さんにはたいへん熱心に本課題にかかる事例と課題を共有し、ご検討いただいたことに、あらためて心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

下記の通り、分科会の実施概要と参加者から出された質問に対する登壇者のコメント・回答を報告いたします。本分科会に関係されたすべての皆さんにとり、本レポート内容が何がしかの振り返りやご活用いただく材料として有用なものとお感じいただけるなら、とても幸いに存じます。

本レポートの構成

本レポートの構成は次のとおりである。①分科会実施概要（タイムスケジュール）②ハテナソンの参考情報③・④質問用紙に書かれた質問およびハテナソンで得られた質問と、それらに対する登壇者4名（大西氏、山崎氏、山口氏、高橋氏：質問項目ごとに登壇順に記載）によるコメント・回



答そして末尾にコーディネータが主にハテナソンで用いたパワーポイント資料のデータを示した。

①分科会実施概要（タイムスケジュール） （末尾パワーポイント資料参照）

10:00-10:03 分科会開演と導入の時間

- ・あいさつ、全体構成の説明、事前配布物全体の確認、タイムテーブルの説明を行う。
- ・ハテナソンを3回のワーク（ひとりワーク1回およびグループワーク2回）に分けて行う旨伝える。

10:03-10:10 ハテナソン：ひとりワークの時間

- ・“日頃のFD/SD課題・問題意識は何か”に答えてもらう（2分）。
- ・モニター画面に「質問の焦点」を示す。
- ・質問の焦点：質問をつくり出すための材料（関与者の協働、期待される学生の成長、学修成果アセスメント、学内外での位置付けの未来像）
- ・最重要な「質問の焦点」を1つ選んでもらう。
- ・回答内容は午前の部の最後にグループ内で共有する旨伝える。
- ・グループで決めた質問の焦点に関するグループワークを午後の部で行う旨伝える。

10:10-11:40 登壇者による発表・質疑応答の時間（京都産業大学：大西氏ら、山崎氏）

11:40-12:00 ハテナソン：グループワークの時間（その1）

- ・1グループ3～4人でグループ分け・グループ番号割り振りをする。
- ・グループ内で自己紹介し、問いへの答えを共有する（2分×4人）。
- ・グループ内で最重要な質問の焦点を1つ選ぶ（3分）。
- ・選んだ質問の焦点は、午後の部のグループワークの材料となる旨伝える。

13:30-14:30 登壇者による発表・質疑応答の時間（立

命館大学：山口氏、高橋氏)

14:30-15:28 ハテナソン：グループワークの時間（その2）

- ・配布用紙にある概要に従い質問づくりを行う旨伝える。
- ・第一ステップ「質問のアイデア出し」のルールと成果物イメージを説明する（2分）。
- ・グループ内で「質問のアイデア出し」を行う（8分）。
- ・第二ステップ「質問の分類と変換」のルールと成果物イメージを説明する（1分）。
- ・グループ内で「質問の分類と変換」を行う（3分）。
- ・第三ステップ「質問の優先順位付け」のルールと成果物イメージを説明する（2分）。
- ・グループ内で「質問の優先順位付け」を行う（5分）。
- ・質問の優先順位付けの基準として、登壇者がつくった質問をモニター画面に映す。
- ・3つのグループから、つくった質問を説明する（1～2分×3、計6分）。
- ・登壇者（大西、山崎、山口、高橋）が総括コメントする（2分×5、計10分）。
- ・報告集で質問に対するフォローアップを予定している旨伝える（2分）。
- ・グループワーク終了。

15:28-15:30 分科会終演の時間

- ・分科会アンケート／質問用紙、質問づくり成果物を提出してもらい、終了・解散。

②ハテナソンの参考情報

- ・正問研究所 The Right Question Institute - A Catalyst for Microdemocracy www.rightquestion.org
- ・図書『たった一つを変えるだけ：クラスも教師も自立する「質問づくり」』
ダン・ロスステインら 吉田新一郎 訳（新評論）

③質問用紙に書かれた質問と、それに対する登壇者のコメント・回答

大西氏、山崎氏、山口氏、高橋氏への質問

Q 正課（特に専門）との関係性をどう担保するか？

大西：ゼミ活動でありますので、正課として取り組んでおります。ゼミのテーマである「地域活性化と企業、行政」という観点からの活動になっています。

山崎：現在は、正課外活動としてのボランティアセンター実施事業を行っており、正課科目への接続を考慮してのプログラムづくりを行っていません。

山口：専門との接続は積極的に行っていませんが、専門への接続が結果としてなされることを期待しています。

Q 学年ごとに到達目標を変えるべきか？

大西：到達目標等の設定はしていないのが現状です。

山口：ルーブリックの観点からすれば設定可能ですが、到達目標は科目ごとに設定しています。

Q サービスラーニングとPBL（ゼミ）の関係はどう構築すべき？

山口：両者は成果への固執が異なる（サービスラーニングは誰にでもできそうなことを他者と共にやり遂げる、PBLは問題発見から問題抽出、そして問題解決のために協働的实践を展開する）ため、積極的に関連づけを行うことは妥当ではありません。

大西氏への質問

Q 井手町の産業構造（現在、井手町に定住している方々の生業、特に若年層）についてと、その将来像に、先生及び学生さんたちがどの程度、関与されるとか、教えて下さい。何を行ってらっしゃるのかはよく理解できましたが、何を目指してらっしゃるのかが、よくわかりませんでした。

大西：井手町の人口減少対策を目標に、町が目指す将来の人口目標に少しでも寄与できればと活動しています。数値目標などは当日の資料で紹介させてもらいましたが、それに向けての具体的、政策的な行動目標が決まっているわけではありません。おかげさまで学生の活動も含め交流人口が順調に増加してきました。今後はこうした交流人口の増加をいかに定住人口の結び付けるかが課題です。今年度からは、井手町が町家バンク制度を立ち上げますので、そこに関連付けた活動を行う予定です。

山崎氏、高橋氏への質問

Q 山崎さん、高橋さんはなぜこのような仕事をしているか？

山崎：ボランティア活動をする中で「ボランティアコーディネーター」という言葉に出会い、学生時代に立命館大学で開講されていた「ボランティアコーディネーター養成講座」を受講したことが最初のきっかけになります。その後の様々な経験

から大学で働きたいと思うようになり、その2つが合わさって大学ボランティアセンターで働くようになりました。学生がボランティア活動を通して自身の学びやフィールドを広げ、その後の人生につながっていくことを願って、日々業務にあたっています。

Q これからどうされるか？

山崎：先のことはわかりませんが、日々の積み重ねを大切にしたいと思っていますので、これまでの経験を生かしながらも、より良い情報発信やプログラム実施をしていけるように、いろいろなところにアンテナを張り、情報収集や自身のスキル向上に努めたいと思っています。

学生への質問

Q 学生が積極的に正課外活動に参加する為に、具体的に何が参加のモチベーションになるのか？

Q 教員として何を与えることが参加のモチベーションになるのか？

回答・コメントは得られませんでした。あしからずご了承ください。

④ハテナソンで作られた質問（質問の焦点別）と、それに対する登壇者のコメント・回答

注：各リストの末尾（1～3つ）にある質問は登壇者らによる質問（末尾パワーポイント資料参照）

質問の焦点 その1：関与者の協働 11 題

Q 大学の中でどのようにコンセンサスを取るのか？

山崎：当センターの実施事業については、次年度予算と連動する年間事業計画において包括的に承認されているため、ボランティアセンター事業で地域団体と協働する場合は、その計画に基づいて、センター決裁で実施しています。学内他部署との連携が必要な場合、その都度、直接担当者と話し合っています。

Q どのように継続的に、マンネリに陥らないでプログラムを作り続けることができるか？

山崎：地域活性化に取り組むプログラムでは、受入地域側と話し合う時間を持ち、なるべく地域ニーズに即した活動に取り組むよう努めています。加えて、参加者アンケート並びに地域との振り返りから出てきた内容を常に検証し、プログラム作りにあたっています。

高橋：変化する地域・社会や地域コミュニティの

あり方、学生の現状等に常に関心を向け続け、絶えず適切なプログラムが提供できているか見直すことを大事にしています。

Q 学生の参加時間をどのように確保するのか？

山崎：当センターで実施しているプログラムは、こちらが設定した日のみ参加するというものですので、学生は自身の興味・関心やスケジュールに合わせて参加します。こちらとしては、なるべく学生が参加しやすいよう、授業のない土日や長期休暇中に体験プログラムを設定するようにしています。

高橋：課外においては、学生の自主的な参加のため確保することを前提にしていませんが、比較的予定を調整しやすいと思われる休日や長期休みにプログラムを実施することが多いです。

Q 資金調達・学生の費用負担への対応なども含め、継続するための秘訣は？

山崎：毎年事業計画を立て、年間の事業とそれに伴う予算を組んで申請し、承認を受けています。そして、その予算の範囲内で事業運営しています。大学の理解を得るために、学内におけるボランティア理解を推進する活動も一方で必要です。学生の費用負担が必要なプログラムについては、交通費や食費など、実際にかかる費用は自己負担としていますが、宿泊プログラムについては、参加費が参加にあたってのハードルとならないよう考慮し、金額を設定しています。

Q 通常の科目（座学など）との整合・展開をどう工夫しているか？

高橋：当センターの正課科目については、教養教育センターの提供する教養科目内のC群「社会で学ぶ自己形成科目」に位置づけられ、学生が学びと成長を深めるための教育プログラムを各学部提供しています。到達目標をもとに、履修の順序は特定せず、学びの段階と現場への関わり性の深さの二軸により科目間の位置づけを示しています。

Q 運営体制をどうしたらいいか？職員の育成方法（正職員/非常勤の役割分担、一般職/専門職の役割分担）

山崎：当センターでは、センター長（教員）、事務職員（専任職員、契約職員）、専門職（嘱託職員）という体制で、大きくは事務的な作業を担う庶務担当と、ボランティア相談対応やボランティアに関する企画立案などを行うボランティアコーディネーターという役割分担で運営しています。センターの方向性や企画内容などについては、スタッフ全員で話し合い、内容を決めています。

高橋：当センターの運営体制としましては、セン

ター長1名、専任教員3名、専任職員15名、専門職3名(2016年3月現在)で、3キャンパスを運営しています。

Q 担当教員、受け入れ機関、行政窓口等の人の異動に伴うプログラムの継続性(人がかかわればどんな支障が出るか?)は?

山崎: 担当者が変わってもなるべく支障が出ないように、プログラムを始める際、また、毎年実施していく中で、双方にとってのプログラムの位置付けや、プログラムとしての方向性をきちんと確認し、合意を得ることが大事だと思います。

高橋: それぞれに組織内で引継ぎいただくのが前提ではありますが、プログラムを進めていくにあたって、その都度相談しながら進めています。

Q O C活動を通じた学生の成長を支える教員・職員・地域のよりよい関係性とは

山崎: お互いそのプログラムを通して何を成し遂げたいのかについて意見を出し合い、共有することができることではないでしょうか。それぞれのやりたいことの最大公約数で実現できるようにプログラムを組んで実施していけると、よりよい学生の成長にもつながると思います。

高橋: 明確な答えはないかと思いますが、大学と地域をつなぐコーディネーター(専門職)の配置がよりよい関係性づくりの一つに寄与すると考えます。

Q O C活動における、学生の成長や学びを支える教職協働とは

山崎: 正課外の活動支援を担う当センターとしては、現在のところ教職協働体制はとっておりませんが、プログラムが目指す方向を明確にし、それぞれの役割から双方が運営に携わることができるとよいと思います。

Q 大学、教職員、そして学生が社会とむすびつくということとはどういうことなのか

山崎: 当センターとしては、学生時代の社会貢献活動を支えるだけではなく、よりよい社会にするためにどう行動すればいいのかという市民性のマインドを育てたいという思いでプログラム作りをしています。センター企画を通して、「学生が社会に出てからも生涯に渡って社会とつながっていくことはどういうことなのか」というモデルを示したいと思っています。

高橋: 学生のシチズンシップを涵養し、より良い社会につながるのではないのでしょうか。

Q 学内(教職員)の温度差や学内のコンセンサスについて、教員評価も含め、どのように対応しているか?

回答・コメントは得られませんでした。あしからずご了承ください。

質問の焦点 その2:期待される学生の成長 21題

Q 学生の希望をプログラムに反映しているか?

山崎: 積極的には反映していません(ただし、活動の展開上、盛り込まれることがあります)

Q 体験するだけで良いのか?獲得できるものが何か、はっきりしているか?

山崎: 体験だけでは良いはずがなく、体験内容の言語化が促される必要があります。獲得できるものが何かはシラバスならびに受講ガイドによって示して予め示しています。

Q 多数の学生の成長を期待する場合に、一部の学生の成長でよいか?

山崎: 一部の学生が集団に影響を及ぼすことを考えれば、一部の学生の成長だけでも差し支えないでしょう。

Q どのように評価(点数化)するのか?

山崎: 立命館大学サービスラーニングセンターの中核プログラムはP/F評価ですので、点数化は行っていません。

Q どのような場合に不可を得るのか?

山崎: 必要時間(42時間)現場で活動していない場合、事前学習・中間振り返り・事後学習・最終報告会を無断で欠席した場合、プロジェクトの参加メンバーによる最終報告会の準備に参加しなかった場合、最終レポートを提出しなかった場合、です。

Q 評価方法はグループ評価、個人の評価、尺度、ルーブリックの活用

山崎: 総合評価ですので、これらを効果的に組み合わせるようにしています。

Q 主体的に学生が活動するためには、どの位の人数がベストか?どの段階で教師は係わるのがベストか?

山崎: 10人程度でしょう。教員が係わるにあたってはグループからチームへの移行段階(役割を明確とする機会)に最も力点を置きます。

Q 教師が何を学ばせたいかによるが、成長の判断は、何を成長とみるか?

山崎: 自分と社会を語る言葉が豊かになるかどうか(内省が促され、事実に対する再詳述ができるようになったか)です。

Q 教育プログラムとしてのサービスラーニングの履修方法・内容はどのようにしたらよいのか?

山崎: 開講担当の機関及び受入先とと充分に相談、

懇談ください。

Q 学生たち、地域のプログラムに対する満足度をどう評価したらよいのか？

山口：満足度は個々の主観によるものですから、教学的な評定とは別の価値体系として位置づけるのが適切ではないでしょうか。

Q 学科間・教員間・教職員間の連携をどのように図ったらよいのか？

山口：方法は多様にありますから、試行錯誤の中で、それぞれの大学、学部、科目の特色を見いだしていただければと願っています。

Q 逆生産性が生まれないようにするにはどんな工夫があるのか？

山口：完成形態などないとして、教員が常に自問自答を重ねることで、ある程度の抑制をもたらすことができるのではないのでしょうか。

Q サービスラーニングで得た気づきをどう測定するのか？

山口：気づきは測定することが困難な領域に思われますので、少なくとも私は個々の学生の言語化（口頭、文字）を促すようにしています。

Q 洞察力、実行力、自己変革力をどう測定するのか？

山口：それぞれに測定することが困難な領域に思われますので、もし、個々の学生の認識を問うだけでよいのであれば、相対評価としてメンバー内の自分の位置をレーダーチャート等で自己分析し、プログラム参加時点と終了直前で比較検討すればよいのではないのでしょうか。

Q ボランティア活動が学生の将来にどのようにつながるのですか？（就職、起業やビジネスの創出などの観点から、学生の成長）

山口：こうした即物的な効果を狙うのであれば、ボランティア活動を組み込んだプログラムの導入は不向きかと思われますので、まずはデューイ等の著作を通じて、民主主義と教育の関係について哲学・理念から紐解いていただくのがよいのではないのでしょうか。

Q サービスラーニングによる授業（学習効果）はどこにあらわれるのか？

山口：授業があらわれる、という意味がわかりませんが、学習効果が反映されるのは日々の生活態度（いわゆるシチズンシップ）と捉えています。

Q 評価やシラバス制定に、地域の方は関わっているのか、関わるべきか？

山口：関わっておらず、関わるべきではないという前提でカリキュラムを整え、一方で活動内容の組み立てをお願いしています。



Q 地域、学生がこのサービスラーニングを経て、どのように望ましい変化になりうるか？

山口：誰にとって望ましい、とされているのかわかりませんが、回答が難しいですが、学生たちが望ましい人物像を抱くようにすること（もっと言えばロールモデルに出会うこと）には力点を置いているつもりです。

Q 就職に必要な能力を意識して授業を実践しているのか？（どのような力が身に付くか、客観的な評価基準があるか？）

山口：意識していません。（ただし、結果として、現代における市民性の涵養を求めたカリキュラムであることを申し添えます。）

Q 学生の質によって身に付く能力や目的等が異なることがあるか？評価は同一か？

山口：当然ながら、身につく能力や目的等は異なることがありますが、評価はあらかじめシラバスに示した到達目標に照らし合わせ、同一の評価基準により行われます。

Q OC活動を通して、どのような学生の成長を期待あるいはイメージしているか

山口：学生の学びと成長に対して単一のイメージは抱いていませんので、回答は差し控えます。

質問の焦点 その3：学修成果アセスメント 13題

Q そもそも何を評価するのか？

山口：与えられた要件に対して不足なく活動し、現場の期待以上の活動水準を集団でもたらすこと（個々の成員によるオーバーアチーブメント）ができたかどうかを評価します。

Q 継続性、連続性は？

山口：活動の継続性、活動の継続性ということであれば、プログラムが継続できる団体は現場の教育力がある団体であると捉えることができること、他の科目との連続性ということであれば、一定、系統的な履修を促すことができるよう、

6つの科目を通じた科目群として各学部を提供しています。

Q 指導教員、主幹部署職員に求められるスキル、能力は何か？

山口：教員の立場を絶対化せず、多様な人々の価値を尊重し、調整し、新たな可能性を創出できる調整能力でしょう。

Q 学生間でネガティブな人間関係が発生した場合、どのように対処するのか？

山口：とことん向き合うように促します。

Q 学生間でネガティブな人間関係が発生した場合、評価に影響するのか？

山口：結果として影響することがありますが、大抵の場合、終了前に居場所がなくなり、途中離脱される傾向が強いです。

Q 評価の方法はどのようにするか？（具体的に、プレゼン？レポート？平常点？）

山口：シラバス及び受講ガイドに示したとおりです。

Q サービスラーニングでの振り返りはどうあるべきですか？

山口：唯一のべき論はありませんので、当該プロジェクトのメンバーに応じて工夫をしながら「あいまいにしない」ことが大切でしょう。

Q 関与者間の相互評価は効果がありますか？

山口：何への効果かわかりませんが、気づきや言語化が促される可能性が高いという効果があります。

Q 異なる学年の学生間での引き継ぎはどのようにやっていますか？

山口：次年度のプロジェクトのサポーターに就く場合があり、経験や文化の伝承という役目を担ってもらっています。

Q 評価の方法（正課の場合）グループの活動→個人の成績にもっていく方法？複数担当者間で統一した評価をするには？

山口：基本的に評価基準は到達目標に対して、評価対象となる素材が揃っているかどうかが問われますので、基本的に著しく評価が変わることはないと考えています。

Q 一人一人の学生をどう評価しているのか？（グループ評価も）

山口：先に回答したとおり、提出された素材をもとにP/F（合格/不合格）で評価します。（グループ評価については、グループへの評価か、グループによる評価か、意図が明確でないので勝手な解釈のもとで行いますが、グループへの評価は最終的には褒めるところは褒め批判するところは批判

するようにしていることと、グループによる評価としては事後学習の際に科目の到達目標に対する参加前・参加終了直前・今後の自らの姿勢や状況について相互比較をしながらの評価を行ってもっています）

Q 客観的な数値による達成目標はあるのか？（人口を増やす？学生の能力値？）

山口：積極的には導入していません。

Q OC活動における学生の学びや成長をどう可視化するか

山口：写真や言葉となるでしょう。

質問の焦点 その4：学内外での位置付けの未来像 13題

Q 継続性をどう保証するか？

山崎：大学においても、地域においても、継続性は保証できるものではありません。ただし、継続しないことのデメリットを考えてプログラム作りをすること、そして、大学側、地域側両方の状況を把握し、お互いに無理なく進めていけるように合意形成していくことではないでしょうか。

山口：大学の事情だけで継続・終了を判断しないということが、継続性の保証への手がかりとなるでしょう。

Q 「ボランティア活動をはじめてください」と言われ、どうやってはじめていいのか？

山崎：ボランティア活動に関する情報を集約し、学生に向けて情報発信する場所を学内に設置することが、まず必要だと思います。情報収集においては、様々な情報があるため、どういう情報を取り扱うかの指針を策定することも必要です。担当者としては、社会福祉協議会が開催されているボランティア講座等を活用し、ボランティアに対する基本的な理解について学ぶことから始められてはどうでしょうか。

山口：誰にでも出来そうなことをきちんとやり遂げればよいのではないのでしょうか。（活動内容がわからないということであれば、まずは地域の社会福祉協議会やまちづくりを担当する部署などに足を運び、チラシを見るなどして、イベントに参加するところから始め、徐々に運営を補助・支援する側に入っていけばよいのではないのでしょうか？）

Q やる気のない学生、教職員をどう動かす？

山崎：やる気のない学生に無理やりやらせる必要はないと思います。しかしながら、こちらとしては「やってみようかな」と思ってもらえるように、活動の魅力や意義を伝えていきたいと思っています

す。教職員が仕事として関わる場合、まずは仕事の特性を理解し、業務に当たることを推し進めることではないでしょうか。仕事上誤った個人のボランティア観が介入する場合は、適材適所という観点から人事担当に相談されるとよいかと思いません。

山口：そうした方々は現場の士気を下げるので、無理矢理何かに引きずりこまない必要があるように思いますが、教育上、立場上、どうしても必要なのであれば、アクティブな学生・教職員がいる場所へ連れ回し「こんな自分が恥ずかしい」と思わせしめることでしょう。

Q 学生主体の活動に、大学の関与のあり方をどのように位置付ければいいのか？

山崎：学生主体の活動に、センターとして関与するということはありません。学生から活動内容や団体運営などについて相談があったときに、相談に応じるというスタンスです。

山口：学生主体の活動なら、学生主体の活動として大学側が関与しないことが適切ではないでしょうか？（しかし、それに対して成績の評価対象にするのであれば、教員の関与は必須となるでしょう）

Q 正課と正課外のボランティア活動の違いは何ですか？

山崎：まずは、単位が出るか出ないかです。学生が正課科目で活動に関わる場合、自主的に活動しているのか、単位が欲しくてやっているのかどちらの考えの学生もいる傾向が強いです。途中で「やりたくない」と思ったとしても、単位をもらうためにやるという状況は発生するかと思います。

山口：履修要綱に修められた科目の一つとして位置づけられているかどうかであり、科目として開講される以上、適切な目的、目標、展開スケジュール、評価方法、評価対象、評価観点が示されている必要があります。

Q 正課と正課外のボランティア活動は何を目的にしていますか？

山口：それぞれの活動の目的に即して設定されています。

Q 沢山の学生にこの授業に参加するためにはどうしたらいいですか？

山口：数が重要ではないという立場でカリキュラムの設計を行っていますが、門戸を開くために、400人規模の座学を3キャンパスで複数開講しています。

Q サービスラーニング科目のカリキュラム上の位置づけ、他科目との連携をどのようにつくり上

げるか？

山口：立命館大学では教養科目C群「社会で学ぶ自己形成科目」として位置づけられており、サービスラーニングセンター内の6科目で、それぞれに位置づけがなされています。

Q 反対者に対して、どのように大学生が参加するサービスラーニングの意義を説明するのか？しているのか？

山口：ホームページと研究会で意味・価値の週及を行っているつもりです。

Q 大学での位置付けはどうなっているか？

山崎：本学においては、ボランティアセンターは教学センターや学生部に属することなく、大学の一部署として独立して位置づけられています。

山口：地域参加型の全学教養科目を企画・推進する教学機関として位置づけられています。

Q 地域側の評価は？

山崎：こちらから地域側に働きかけない限り、なかなか地域からの反応を聞き取ることが困難というのが、現状です。故に地域と協働で運営しているプログラムについては、受入担当者と話す際にその担当者を介して地域住民の反応を聞き、次年度のプログラムづくりに活かしています。

山口：次年度も共に教学実践を行うかどうか、それが最大の評価となっています。

Q 教員効果の考え方の違いは？

山口：教育効果のことをお尋ねなのかもしれませんが、問いの解釈ができかねますので、回答は差し控えさせていただきます。（教員間で価値が異なるため、教育の効果に対しても考えが違ってくるかどうか、ということであれば、当然、重視する項目は経験や専門によって変わってくるでしょうから、違いはあります、とお受け止めください）

Q 20年後、OCによる学びは大学教育にどう位置付けられているか

山口：18歳人口だけが大学に通わなくなる可能性があること、何より奨学金が多様化する可能性が高いことを鑑みれば、よりアクティブな学生はアクティブに、パッシブな学生はパッシブになり、一概にOC活動の総合的な推進というのがナンセンスになるでしょう。（相談対応や成果の共有のための機関は必要となるでしょうし、例えば米国であればUCバークレーやノースイースタン大学が今何をしているか、などが一つの手がかりになりそうな気がします）

以上

第1分科会コーディネータ
佐藤賢一（京都産業大学）

FDフォーラム 第1分科会
**地域貢献アウトキャンパス活動がもたらす学生の成長
 その現状と可能性について**

FDフォーラム 第1分科会 タイムテーブル

午前の部
 10:00-10:03 分科会開演と導入の時間
 10:03-10:10 ひとりWSの時間
 10:10-11:40 登壇者による発表・質疑応答の時間（京都産業大学）
 11:40-12:00 グループWSの時間（その1）
 12:00-13:30 昼休憩

午後の部
 13:30-14:30 登壇者による発表・質疑応答の時間（立命館大学）
 14:30-15:28 グループWSの時間（その2）
 15:28-15:30 分科会総括と終演の時間

FD, ファカルティ・デベロップメント; WS, ワークショップ

京都産業大学からの事例報告・話題提供

大西 辰彦 経済学部 教授
小川 俊雄 井手町まちづくり協議会 会長
花木 秀章 井手町企画財政課 課長
 大西ゼミ在生
山崎 智文 ボランティアセンター 専門職員

立命館大学からの事例報告・話題提供

山口 洋典 共通教育推進機構 准教授
高橋 あゆみ サービスラーニングセンター 主事

ひとり&グループWSの目的

参加者が本分科会テーマにかかる重要な質問を作る

作った質問の用途

分科会の最後に一部を共有する
 登壇者が報告書にてコメントする

問い：答えてください

あなたの日頃のFD/SD問題意識は？

質問の焦点：選んでください

- ・ 関与者の協働
- ・ 期待される学生の成長
- ・ 学修成果アセスメント
- ・ 学内外での位置付けの未来像

SD, スタッフ・デベロップメント

質問づくり：三つのステップ

- 一、質問のアイデア出しをおこなう
- 二、質問を分類し変換する
- 三、質問に優先順位をつける、発表する

質問のアイデア出しのルール

- ① できるだけたくさんの質問をする。
- ② 話し合ったり、評価したり、答えたりしない。
- ③ 質問は発言のとおり書き出す。
- ④ 意見や主張は疑問文に直す。

質問を分類し変換する

- ① 閉じた質問と開いた質問の違いを知る。
- ② 閉じた質問に△、開いた質問に○をつける。
- ③ 閉じた質問と開いた質問の特徴を話し合う。
- ④ 1～2つの質問を他の質問に書き換える。

質問に優先順位をつけ、発表する

- ① 優先順位をつけるための基準を考える。
- ② 優先順位の高い質問を3つ選ぶ。
- ③ 選んだ質問の理由を述べられるようにする。
- ④ グループ活動の成果を全体に報告する。

学内外での位置付けの未来像

・20年後、アウトキャンパス(以降OC)による学びは大学教育にどう位置付けているか

期待される学生の成長

・OC活動を通して、どのような学生の成長を期待あるいはイメージしているか

学修成果アセスメント

・OC活動における学生の学びや成長をどう可視化するか

関与者の協働

・OC活動を通じた学生の成長を支える教員・職員・地域のよりよい関係性とは
 ・OC活動における、学生の成長や学びを支える教職協働とは
 ・大学、教職員、そして学生が社会とむすびつくとはどういうことなのか

あなたは何を学びましたか？

自分で質問できるように学ぶことはなぜ大切なのですか？

学んでいる内容について何を学びましたか？

どのように学んだのですか？

質問する際はどんな感じがしましたか？

行ったことのなかで、よかったことは何ですか？

質問づくりの方法を今後どのように使いますか？

井手応援隊の活動について

京都産業大学 経済学部 教授 大西 辰彦



1. 井手応援隊の経緯

- 2012(平成24)年
井手町人口減少対策検討委員会への参画
- 2013(平成25)年
井手町と大学との包括協定の締結。同年秋に大西ゼミとして井手町の人口減少対策支援活動を開始。井手町まちづくり協議会の皆さんとの協働モデルで開始。
- 2014(平成26)年
井手町「イノベーションチャレンジ事業」の予算化。役場の若手職員の皆さんが協働モデルに参画。
- 2015(平成27)年
3回目の支援事業を実施。今回の学生活動の様子をNHKが紹介。

2. 平成27年度活動内容

- ①域外からの交流人口の増加
- ②町民の皆さんのシビック・プライドの醸成

- まちのシンボルである「玉川」の清掃とライトアップ
- 地元名産品による食のイベント
- 子どもたちを対象にしたラン・イベント
- 民泊体験と情報発信



3. 井手応援隊の活動目標

- ▶活動期間、方針、目標などを掲げて活動
- ▶井手応援隊活動計画による展開

京都産業大学・井手応援隊
(経済学部大西ゼミ)
活動計画

平成24年4月策定
平成27年10月改訂

■活動期間
2013年から2022年の10年間

■井手町の現状

◎人口減少
9,438人(1995年)ピークに
減少に転じ、2010年は8,447人

◎特に若年層の転出超過が進展

井手町の性別・年齢層別の純移動数(2005→2010年)

出典:井手町人口ビジョン2015

■井手町の人口目標

2035年までに新規住宅開発、空家活用等の
新たな取り組みによる新規転入者1,000人を
実現し、人口8,244人を目指す

井手町の人口の将来推計

井手町地域創生計画2015より

■井手応援隊の活動目標
 応援隊活動による新規転入者100人の実現(町目標の1割を担う)
 特に20歳代・30歳代の純移動数をプラスに引き上げる。

■応援隊の活動理念

1. 井手町の魅力を発信し、地域内・外から多くの「人」を集める。
2. 町民(土の人)と協働し、町に対する愛着や誇りを高めるための「風」を起こす。
3. 自らの心にも郷土愛や達成感・自信という「光」を与える。

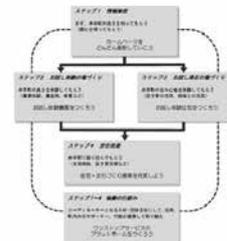
我々の行動目的は、「人・風・光」の相乗効果による井手町の人口減少対策である。

■活動のロードマップ



■活動の具体例

井手町人口減少を食い止めるための検討委員会提言書より



ステップ1 情報発信
 町民の魅力を発信し、地域内外から多くの「人」を集める。
 ・井手みねーしょん
 ・魅力発信イベント
 ・まちおこし講演会・ワークショップの開催
 ・SNSによる広報展開 など

ステップ2 土起こしプロジェクト
 集プロジェクトで結ばれた若メンバーを中心に転入増加プロジェクトを展開
 ・空家バンクの設立
 ・空家活用による定住促進
 ・回遊型観光施設「まち歩き」の推進
 ・若年層シェアハウスの開設 など



ステップ3 人を起こす
 人を呼び込み転入人口の増加目標を実現

ステップ4 定住促進
 町民の魅力を発信し、地域内外から多くの「人」を集める。
 ・井手みねーしょん
 ・魅力発信イベント
 ・まちおこし講演会・ワークショップの開催
 ・SNSによる広報展開 など



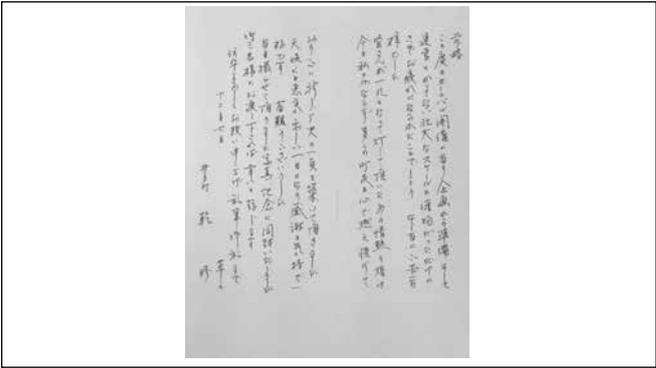
■おわりに

徳島県神山町グリーンバレーでは、地域創生のきっかけとなるプロジェクトで築かれた地域住民の町への愛着と誇りと絆(シビックプライド)が後の成功を生み出す要因となっている。

そして、2011年にみごと人口の転入超過を実現。

しかし、それはリーダーである大南信也氏が活動を始めてから25年目のことであった。

- #### 4. 「土」の人の変化
- 井手町まちづくり協議会の皆さんの参画・協力
 - 井手町役場の若手職員の皆さんの参画・協力
 - 井手町在住の高校生が活動を知って京産大に入学。大西ゼミに加入し活動を実施。
 - 井手町在住の大学生(他大学)が大西ゼミに参加し、活動を実施。
 - 井手町民の方々の変化(一通の手紙)



- #### 5. 学生に差し込む「光」
- 人を「巻き込む」難しさで鍛えられる。
 - 迷ったときの拠り所となる義を「作り込む」経験は重要
 - やればできると「信じ込む」心が行動を変える
 - 指導者として重要なこと
 - 「場」の設定と「目肥」
 - 実践から理論へ、そして再び実践へ。

6. 活動の基盤(ゼミ活動の特徴)

平成27年度(2015年度)

大西ゼミ「演習Ⅰ」活動計画書

地域貢献アウトキャンパス活動がもたらす学生の成長：その現状と可能性について

井手町まちづくり協議会 会長 小川 俊雄

井手町は豊かな歴史的資源や自然に恵まれた所です。京都市には約 10km、学研都市には約 5km と非常に近距離にあるものの、交通や日常生活が不便なことから若い人達の町外流出が続き、平成 7 年には約 9400 人余りだった人口が、現在では 7792 人となりました。地域住民も危機感を募らせています。

こうした現状の中で、地域の自然や歴史文化を再発見する取り組みなどが、団体や住民の間から起こってきました。そこでまちづくり協議会がつくられ、平成 15 年 4 月、まちづくりセンター椿坂としてオープン致しました。この施設は、町設、民営です。大きな目標は、「井手町に生まれたこと、住んだことを誇れるまちづくり」を旨とし、自然と地域文化をより井手町らしく高めるまちづくりであり、そのため地域間の世代交流をしながら住民主体で取り組もうとする理想的なものでした。しかし理想は高くても現実はそうでもありません。

10 年を迎えた平成 25 年、京都で一番早くさくらが咲くまちプロジェクトを計画致しました。井手町と連携協力包括協定を結ばれた京都産業大学の学生グループ「井手応援隊」に参加いただき、協議会と共催でイベントを開催することになり、昨年で 3 年目を迎えました。

平成 26 年、27 年の、京都で一番早くさくらが咲くプロジェクトの前夜祭として「イルミネーションイベント」の取り組みをしていただきました。この取り組みは、学生自ら企画し、町内の竹林から切り出した竹で作った竹灯籠はじめ、町内の保育園児や小中学生、デイサービスセンターの利用者の方々による牛乳パックを使用した灯籠など、約 2300 個を玉川堤に並べていただき、多くの住民の方が参加され、秋の夜の玉川を鮮やかに映してくれました。

平成 27 年は、イベント名が「おいで！すごいで！楽しいで！食と燈のカーニバル」ということで、「井手！みねーしょん」（これは 11 月 28 日実施）とされました。11 月 29 日には、はらぺこランドその他、井手町にゆかりの深い歴史上の人物に扮した人達による「時代絵巻行列」に参加していただき、イベントで盛り上げていただきました。学生の皆様はこの事業に対し、早い月から井手町に来て色々な住民の方とふれあい、自分達で企画を立て、我々協議会も協力や話し合いを進めてまいりました。またその中で、役場職員の若い方達とも何回となく意見交流をしていただきました。

私は、地域の人協議会の我々と学生の皆様とが今回の取り組みで終わることなく、今後とも交流を深め、意見の交換をしてはと思います。我々協議会の高齢者は、地域での色々な知識を持っていると思います。これからも共に、日程が取れたら意見交流をしたいと思っています。

京都産業大学における正課外アウトキャンパス活動の取り組み

京都産業大学 ボランティアセンター コーディネーター 山崎 智文

2016.3.6 (日) 第21回FDフォーラム第一分科会
地域貢献アウトキャンパス活動がもたらす学生の成長：その現状と可能性について

京都産業大学における 正課外アウトキャンパス活動の取り組み



京都産業大学ボランティアセンター
コーディネーター 山崎 智文

農山村の活性化に取り組む宿泊型体験プログラム

ふるさとワークステイinふくい

ふるさとワークステイinふくい：企画概要

<趣旨>

地域の活性化につながる活動への参加

地域課題の発見
地域住民との交流・協働
地域の活性化に貢献
非日常での活動

地域社会の現状への理解を深める

学生の「学び」と成長に資する経験の提供

ふるさとワークステイinふくい：企画概要

<目的>

- ①地域における諸課題の存在への気づきを深める
「洞察力」を身につける
- ②地域の諸課題に対して協働で解決に取り組む
「実行力」を身につける
- ③普段の自分の枠組みを超え、一歩を踏み出す
「自己変革力」を身につける

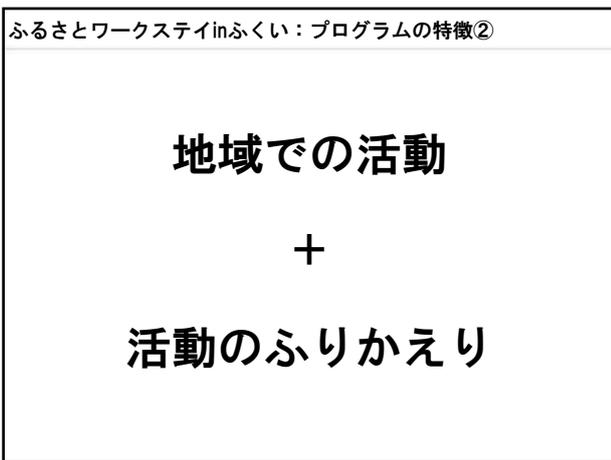
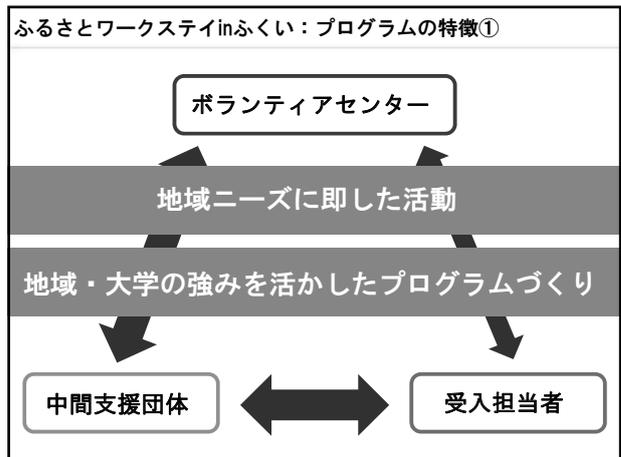
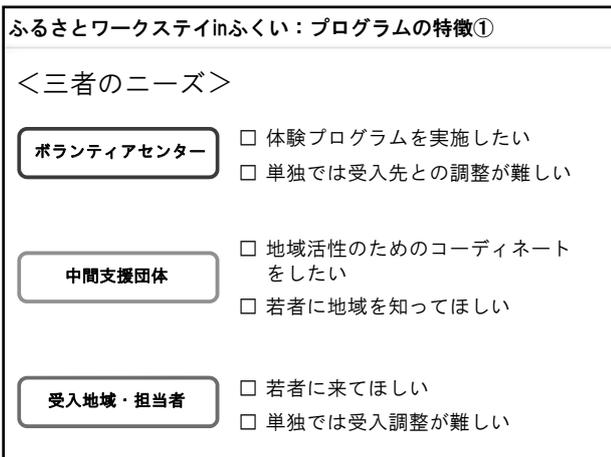
ふるさとワークステイinふくい：企画概要

<活動地域・参加者数（2015年度）>

活動地域	募集人数	参加者数
福井市上味見	12	10
福井市殿下	12	11

ふるさとワークステイinふくい：プログラムの特徴①





ふるさとワークステイinふくい2015：プログラム構成

2015年度	午前	午後	夜間
1日目	京都駅集合 オリエンテーション 電車移動	各活動地域にて オリエンテーション	1日のふりかえり
2日目	各地域で活動		1日のふりかえり
3日目	各地域で活動		1日のふりかえり
4日目	各地域で活動	1つの地域に合流	全体ふりかえり
5日目	合同作業	福井駅へ移動 電車乗車 京都駅解散	





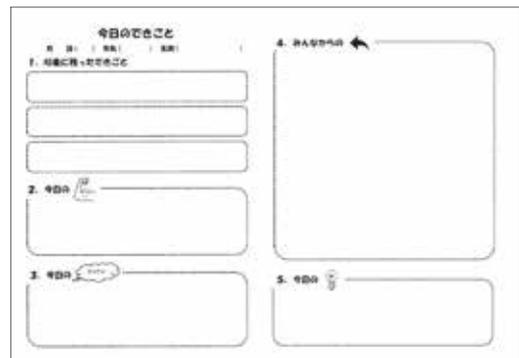
ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<各地域での活動> @殿下：宿舎改修作業



ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<毎晩のふりかえり> 1人1日1枚ワークシートを配布



ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<毎晩のふりかえり>

①個人で記入




ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<毎晩のふりかえり>

②項目ごとに共有




ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<毎晩のふりかえり>

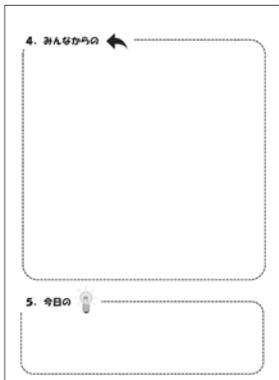
③他者へのコメント記入




ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<毎晩のふりかえり>

④「今日の気づき」を記入

ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<全体ふりかえり> ①各地域の活動の共有

<活動内容> 私たちはこんなことをしました。	<活動の目的> それは、〇〇の目的でした。
<果たした役割> こんな役割を果たしました。	<地域の反応> こんな反応がありました。

ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<全体ふりかえり> ②テーマトーク

- ・1グループ4~5人に分かれて、グループ内でエピソード共有
- ・カードをめくって、書いてあるお題について話す (1人1分程度)

印象に残ったできごと	印象に残った人物
これが大変だった！	これ、がんばりました！
一番おもしろかった瞬間	びっくりしたこと
感動したこと	この経験を通じて伝えたい？
こんなことが役に立った	新しく知ったこと
戸惑ったこと	楽しかったこと
一番おもしろかった瞬間	これ、がんばりました！
びっくりしたこと	楽しかったこと

ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<全体ふりかえり> ②テーマトーク



ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<全体ふりかえり> ③イメージの変化

出発前オリエンテーションで考えた「いなかのイメージ」のキーワード

↓

「変わった」「変わらなかった」に分類し、エピソードを記入

↓

新しいイメージを付け足し、同じくエピソードを記入

ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<全体ふりかえり> ③イメージの変化



キーワードを分類



エピソードを記入

ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<全体ふりかえり> ③イメージの変化



ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<全体ふりかえり> ③イメージの変化

The whiteboard shows a 'change' section with '山に親近感' (familiarity with mountains) and 'Welcome Country / (friendly)な人達' (friendly people). The 'New' section lists '山に親近感' (familiarity with mountains), '山に親近感' (familiarity with mountains), '山に親近感' (familiarity with mountains), and '山に親近感' (familiarity with mountains).

ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<全体ふりかえり> ③イメージの変化

The whiteboard shows a 'change' section with '山に親近感' (familiarity with mountains), '山に親近感' (familiarity with mountains), and '山に親近感' (familiarity with mountains). The 'New' section lists '山に親近感' (familiarity with mountains), '山に親近感' (familiarity with mountains), and '山に親近感' (familiarity with mountains).

ふるさとワークステイinふくい2015：活動の様子

<全体ふりかえり> ③イメージの変化

The collage includes photos of students presenting their work and a group discussion.

ふるさとワークステイinふくい2015：学生の反応

雨の中での作業に加え、慣れない登山に…

もう山には登りたくない！

大変な作業だったからこそ…

達成感でいっぱい！！

ふるさとワークステイinふくい2015：学生の反応

切り倒した木や竹を使って柵を作る職人さんの姿を見て…

そこにあるもので作るなんてすごい！

一から道作りに携わり、道が完成して…

自分たちの手で道が作れるなんて感激。

ふるさとワークステイinふくい2015：活動地域の反応

地元の山に学生が登って、道案内の看板を立てたと聞いて…

そんなこともやってくれたんか。ありがとう！

2日間で川へ降りる道が完成して…

2日間でできるとは！学生もなかなかやるなあ。

ふるさとワークステイinふくい2015：学生への効果

①「洞察力」



祭りの準備や祭り前夜の会食での地域住民との交流

↓
地域の方々と親しくなる

↓
祭りへの想いを聴く



自分たちがどう振る舞えばいいかを考えた上で、祭りに参加

ふるさとワークステイinふくい2015：学生への効果

①「洞察力」



たまたま見かけた食品の移動販売車

↓
地域住民の生活を垣間見る

過疎高齢化地域での暮らしぶりへの関心が高まる

ふるさとワークステイinふくい2015：学生への効果

②「実行力」



・生活面でも、作業面でも、共同作業
・地域住民と一緒に取り組む

↓
仲間意識、親しみの芽生え



協力して取り組むことへの積極性の芽生えに加えて、楽しみ方の工夫も

ふるさとワークステイinふくい2015：学生への効果

③「自己変革力」



引込み思案な性格の学生
→積極的に声が出せるようになった。

参加2回目の学生
→新たな価値観を身につけた。



ふるさとワークステイinふくい2015：学生への効果

ふりかえりの効果



全体ふりかえりでお互いの活動を共有



経験の客観化

ふるさとワークステイinふくい2015：地域への効果



→長い間担がれていない御神輿

担ぐのは、学生には無理

毎年の交流を通して、「学生と一緒にやってみよう」という気持ちに

いけるかも



ふるさとワークステイinふくい：地域への効果

学生の合流の際に、
地域の受入担当者も合流



地域同士の交流から、つながりが生まれる

ふるさとワークステイinふくい：まとめ

○初めて活動を作るときには

- ・ **完璧なスタートでなくてもいい**
→お互いに成長しながら進めていける
- ・ **地域に詳しい団体（人）に間に入ってもらう**
→自分の力でできないところをうまく分担

ふるさとワークステイinふくい：まとめ

○地域活動プログラム企画・運営のポイント

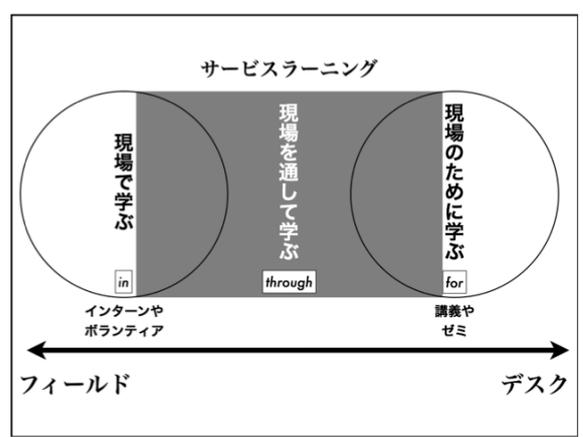
- ・ 受入側と顔を合わせて話し合う時間を持つ
- ・ お互いの状況を共有して、プログラムを作り込む

「委託」ではなく『協働』



地域貢献の視点から見たサービスラーニングの課題と展望 ～学びのプロセスに着目して～

立命館大学 共通教育推進機構 准教授 山口 洋典
立命館大学 サービスラーニングセンター 主事 高橋あゆみ



立命館大学におけるサービスラーニングの展開
学生活動(1995)→正課カリキュラム化(1999)→地域連携(2001)→研究着手(2002)→GP(2005)→

年	エポック	専門職員	教員
1995	ボランティア情報交流センター設立(1月)・解散(7月) (学生課が所管)	1	-
1999	ボランティアコーディネーター養成プログラム・開始 (産業社会学部が開講・2005年度から全学展開)	-	1
2001	BKCにて「立命の家」事業開始 (学術系団体による地域の小学生を対象した交流企画)	-	1
2002	「ボランティア・スキルマッチング・エージェンシー」開始 (立命館大学、キリン福祉財団、京都市社会福祉協議会の協定)	-	1
2003	全学機関としてのボランティアセンター設置・決定	-	-
2004	ボランティアセンター衣笠・開設	-	2
2005	全学共通科目「地域活性化ボランティア」・開講 (現代GP「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」採択)	-	2
2006	ボランティアセンターBKC開設	2	3
2008	サービスラーニングセンターに改組 (共通教育推進機構設置に伴う)	2	3
2011	災害復興支援への取り組み、ミッションとポリシーの策定	2	3

mission	policy
学生のシチズンシップを涵養する	地域コミュニティに常に関心を向ける
参加型学習プログラムを開発・運営する	提供できているか 絶えず見直す
課外活動を支援する	活動の機会を拡充する
ネットワークを構築する	指標の確立につとめ積極的に活用していく
活動や資源をコーディネートする	ニーズのすりあわせは将来を展望した上で行う

設置相契
教学機関
正課と正課外の接続
社会的責任
地域貢献

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf>
日本学術会議「大学教育の分野別質保証の在り方について」(2010.7.22) p.38

(6) 参加型学習の必要性
「市民的教養」の育成を基本とした教養教育においては、教育方法についても工夫が必要である。今までの議論でもたびたび参加型学習の必要性について触れてきたが、大学教育一般に関して、教師による Teaching 主体から学生による Learning 主体へと力点を変えていく必要性が指摘されており、そのために、従来の一斉形式の講義による授業だけでなく、様々な参加型学習を実施する工夫が求められていることは周知の通りである。具体的には、ゼミ、セミナーなどの形態や PBL (Problem Based Learning)、サービスラーニングなどワークショップ型の多様な教育形態が挙げられる。
しかし、とりわけ市民的教養の育成という理念に照らして、参加型学習が重要であるということは、現在教養教育を担う多くの授業科目が、おそらくは一斉形式の講義によって行われているであろうことへの問題提起も含めて、改めて強調しておく必要があると思われる。かつての「豊かな人生」へのパスポートとしての市民的教養ではなく、自律と連帯によって公共性にコミットする現代的な市民性を培う教養教育にとって、このことは極めて重要である。
また、教養教育が担われる場合は、大学の中だけであるとは限らない。社会の公共的課題の発見

※ 例えば、1960年代末から70年代半ばに、英国及び米国の理工系大学に導入された教育プログラム(英国:「社会的文脈における科学」"Science in the Social Context"、米国:「科学技術と社会プログラム」"STS Program")は、専門教育との関わりを重視した教養教育の一つの実例と言えるだろう。

出あいプロジェクトとは

◎背景、目的

大学周辺地域での課外プログラムの展開
主に理系学生の学生生活に応じた取り組み
正課科目と課外プログラムの連関



**学びの素地を作ること
ボランティア活動の活性化につなげること**

出あいプロジェクトとは

◎企画概要

- ・地域の日常に出あうこと
- ・短時間構成
- ・キャンパスから歩いていける場所

学生と地域の接点づくり

出あいプロジェクトとは

◎企画概要

- ・プログラム名：日時
- ①緑化活動：2015年6月2日（火）8:30～11:30
- ②まちあるき：2015年6月14日（日）13:00～15:00
- ③スクールガード：2015年6月25日（木）7:30～8:00

・参加者数：延べ10名

- ①2名
- ②3名
- ③3名

・活動場所
志津南学区内（連携先：まちづくり協議会）





一プログラムから他プログラムへの展開

・継続した学びの展開を意識

課外プログラム	学びのモデル	正課科目
ボランティアガイダンス 対話・交流プログラム	知る	地域参加学習入門 全学インターンシップ
ボランティア体験プログラム 地域活性化プログラム	触れる 考える	現代社会のフィールドワーク シチズンシップ・スタディーズI シチズンシップ・スタディーズII
学生コーディネーター	企画する	ソーシャルコラボレーション演習

一プログラムにとどめない
現場体験での学びと大学での学びの
往復による学生の学びと成長を促す

学生の成長の可能性

参加者の声：
「とてもよくしてもらったので
継続して少しでも貢献できたらいいなと思った」

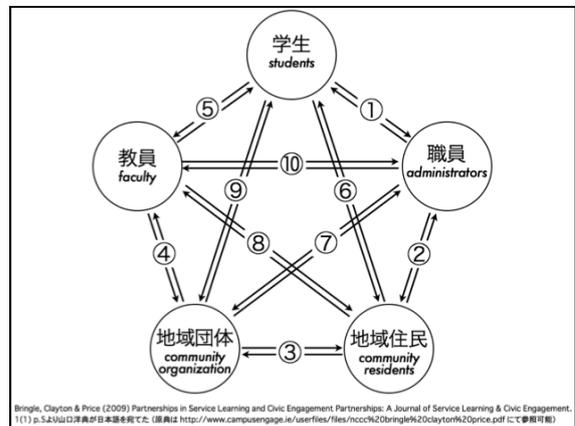
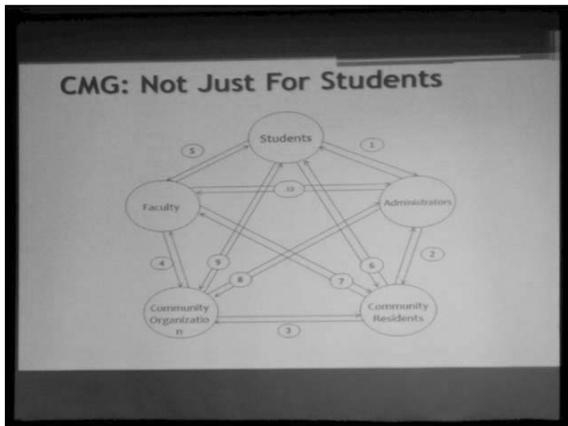
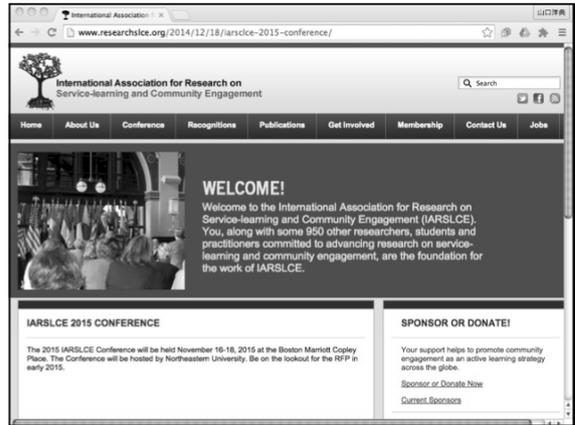
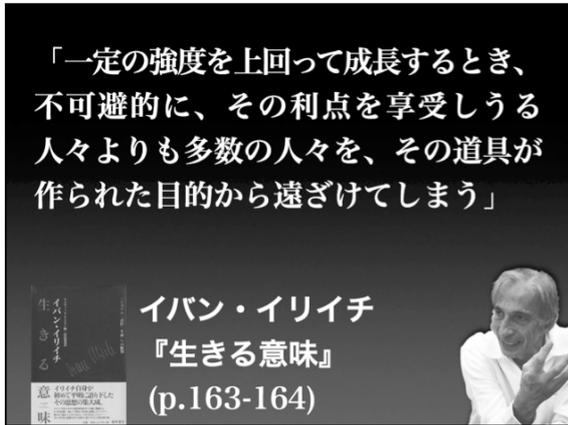
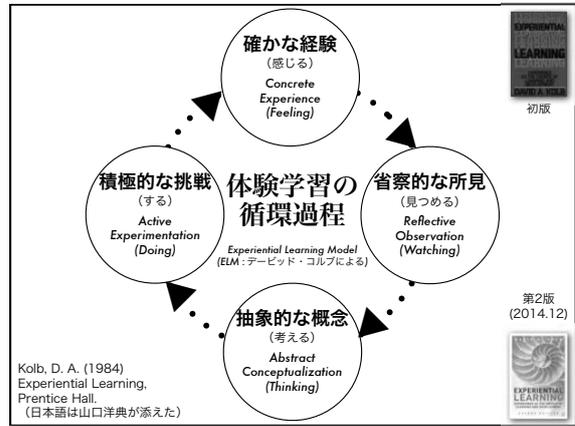
自分への関心 → その“人”への関心 → 地域への関心

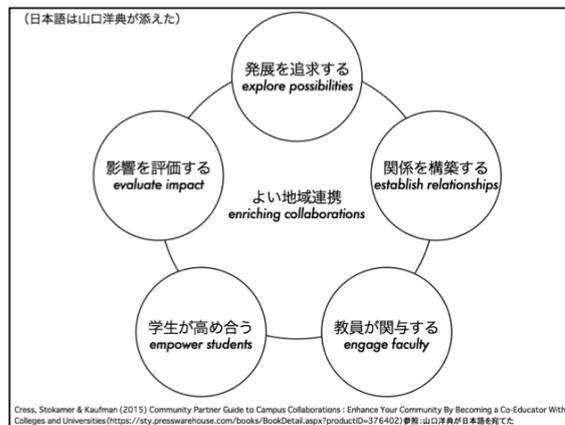
↓

新たな自分への出会い
新たな考え、価値観、生き方への出会い

次の一手

1. 地域・地域の人と出会う
2. 地域・地域の人を知る
3. 地域・地域の人へ関心を寄せる
4. 継続的に地域へ関わる／地域について学ぶ
5. 地域の日常と学生の日常が重なる





The collage includes photos of a festival and a group of people in white. A central diagram titled "時代祭での 相関図 (試案)" shows four nodes: "学生" (Students), "教員" (Faculty), "地域団体" (Community organizations), and "地域住民" (Community residents). Lines connect these nodes, with a thicker line connecting "学生" and "教員".

発表内容と実践に関連する書物のご紹介

Two book covers are shown. The left one is "SOCIAL INNOVATION 身近な社会問題解決のためのトピックス30" (Social Innovation: 30 Topics for Solving Social Issues Close to Home). The right one is "臨地の対人援助学" (Social Work in the Field: A Study of Human Assistance in the Field). Below the books is the contact information: "ご質問など... gucci@fc.ritsumeimei.ac.jp".

